

「ビブリオグラフィー」と「ビブリオロジー」

—ガブリエル・ペニョ論への序説—

Bibliography and *Bibliologie* —An introduction to Gabriel Peignot—

岩本吉弘

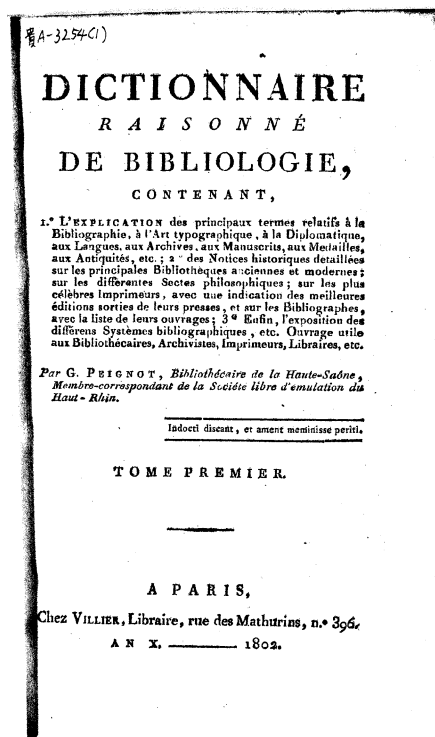
IWAMOTO Yoshihiro

「ビブリオロジー bibliologie」（ここでは「書物学」と訳しておこう）という、わが国ではほとんど耳にすることもない言葉について書きたい。これはガブリエル・ペニョ（1767-1849）というフランス革命期から七月王政期にかけて活動したある人物が、1802年から04年にかけて出版した『書物学事典 *Dictionnaire raisonné de Bibliologie*』（3 vols, Paris, 1802-04）という書で用いたものである。私が彼について興味を持ったのは、以前古典資料センターに助手として勤務している頃、フランスの王政復古期頃の出版状況について知りたいという動機で、たまたま彼が編纂した文献目録の一つを購入した時である。私はその時ペニョという人物の名前すら知らなかったのだが、それをきっかけに彼の著作のいくつかに触れ、そしてこの『書物学事典』とその第3巻の巻末に付されている「書物学体系一覧表」というフォリオ版のリーフ5枚に及ぶ壮大な体系表を目にした。その時、目のくらむようなある鮮烈な目映さを覚えたのを記憶している。これは、本という物体が秘めた宇宙に向けての啓蒙主義の夢の炸裂だ、私はそう感じた。

今年度の古典資料センター講習会の講師の依頼を受けて、私は別に書誌学や図書館学の専門家ではないのだが、「書誌学」の講義の一つとして、ペニョと彼の「書物学」について私の知るところを話すことにした。この稿の執筆の動機は、古典センターのお誘いもあり、ついでに文章にもしておこうというものである。まず本稿では、当日語った事柄のうちペニョが作ったフランス語の *bibliologie* という言葉の意味や歴史について述べ、ペニョ論に関する序説といったものとした。

bibliography と bibliographie

耳慣れない *bibliologie* と違って、「ビブリオグラフィー bibliography」という言葉は普通に使われているが、我々はそれを「書誌」と訳したり「書誌学」と訳したりする。例えばジョン・



ガブリエル・ペニョ
『書物学事典』第1巻

カーター著『西洋書誌学入門』（横山千晶訳，原タイトルは *ABC for Book Collectors*）という一種の用語辞典を例にとると，カーター氏は，この言葉には，「研究をさらに深めたいときの手引きである関係図書目録，あるいは著者が参考にした参考書目のこと」という意味と，「かたちあるものとしての書物の研究のこと」という「ふたつの意味」があるとし，そしてこの訳者の方も「書誌；書誌学」と2つの訳語を併記している。

さらに訳者の「あとがき」には，この言葉の多層的なインプリケーションについて次のような詳しい説明がある。つまり，前者の意味の「一定の決まりに沿って配列された図書目録」は「systematic（または descriptive bibliography）」（体系書誌，記述書誌）であり，一方後者の意味での「本を研究対象とした学問」は「analytical（または critical）bibliography」（分析書誌学，批判書誌学）と呼ばれるもので，こちらが「つまり書誌学」である。その対象をなすのは，「出版物を構成するもの一紙，インク，製本材料（糸，針金，糊，革，紙，ヴェラム，布など）一，そして，図書ができ上がって人手に渡るまでの過程に携わる人々—作者，挿し絵画家，彫刻家，製紙工，活字鋳造者，印刷師，製本師，小売り業者，出版者，書籍商，目録編纂者，読者など—にいたるまで，「活字文化」を取り巻くすべての物や者の大宇宙」の全体である，と。

つまりこの「bibliography」という言葉は「書誌学」とは訳されるが，この訳語を“書誌の学”と取ると誤解する。そこには，書誌・書目それ自体やその編纂ということとどまらず，本とそれを媒介とした文化・社会関係を巡る巨大なコスモロジーが対象として封じられているわけである。

これは現在の英語の「bibliography」と，その中核をなす「analytical bibliography」の説明としてまことに適切・簡潔なものである。だがフランス語の bibliographie については事情がかなり異なっているのである。この言葉の持つ歴史について，過去最も徹底的な調査・研究をおこなったのは，*«Que sais-je?»* 文庫所収の *La bibliographie*（藤野幸雄訳『書誌』，白水社クセジュ文庫 645）や極めてすぐれた書誌文献案内である *Manuel de bibliographie* その他の著作を残した L.-N. マルクレスであろう。彼女が幅広い歴史的探求の末に言うビブリオグラフィーの定義は次のようなものである。

「ビブリオロジーすなわち書物の科学 la science du livre の一部門を占め，知的作業を容易にするための文献目録を構成する目的で，印刷資料を調査し，知らせ，記述し，分類することを任務とするもの。」（Malcles, L.-N., *Manuel de bibliographie*, 3^e éd., Paris, 1976, p. 19.）

つまり彼女の理解では，上に見た英語の bibliography の概念で言うと「記述書誌」の編成を目的とするもののみが「bibliographie」（＝「書誌学」）なのであって，「分析書誌学」という用語で包括される多様な「本を研究対象とした学問」については，この「書誌学」の上に「ビブリオロジー」（＝「書物学」）という概念が存在するのである。実際，英語の analytical bibliography をそのまま bibliographie analytique などとフランス語風に言い換えても，「分析書誌学」ではなくむしろ「解題付き文献目録」という意味になってしまうだろう。

「bibliographe の科学」

このマルクレスの定義にある「ビブリオロジー」という言葉は，はじめに述べたようにガブリエル・ベニョが用いたものである。ベニョ自身のことはとりあえずおいて，本稿ではこうした「ビブリオグラフィー」という用語を巡る英仏の差異が生まれた経緯について述べておきたい。マルクレスの著書なども参考にしつつ関連文献を当たってみると，それはおよそ次のようなものと考えられる。

この bibliographie・bibliography という用語は元々ギリシャ語で書物を意味する「biblion」と、書くという意味の「graphein」とから来ており、したがって本来は「本を書く」=「写本を作成する」行為やそのための知識や技術といった意味が出発点の言葉のようである。この言葉が上に述べた現在の意味の一方である書誌・図書目録それ自体という意味を帯びようになるのは17世紀前半のガブリエル・ノーデの例 (Naudé, G., *Bibliographia politica*, Venise, 1633) を先駆とするごく新しいことで、ヨーロッパでは、少なくとも19世紀初頭までは、原義に近い写本・印刷本の書物に関わる知識全般、それを対象とする科学・学問といった意味で、つまり単数の抽象名詞として使われる方が普通だった。前者の意味で伝統的に使われてきたのは Bibliotheca, Catalogus, Repertorium, Inventarium, Index といった用語である。18世紀後半にいたっても、一方でドゥ・ビュールの *Bibliographie instructive* (10 vols, Paris, 1763-1782) のような浩瀚な「ビブリオグラフィー」(=文献目録) が出版されていながら、他方で例えば『百科全書』には Bibliographie という項目はなく、「Bibliographe」という項目で次のようなごく短い記述があるだけである。

「**BIBLIOGRAPHE.** この言葉はギリシャ語に由来し、木の皮、紙、羊皮紙に書かれた古い写本に関する知識やその解説に精通した人を意味する。Scaliger, Saumaise, Casaubon, Sirmond, Patau, Mabillon は、*bibliographie* と呼ばれるこの種の科学に熟達していた。」

つまり「ビブリオグラフィー」とは、とくに文献目録やその編纂行為を指すといったものではなく、古文書学者=bibliographe が写本の素材や型式や書かれている文字などについて持っている知識や技術全般であり、そういう意味での多様な内容を持った「ビブリオグラフの科学」である。このような理解は、対象の中に活字印刷本が含まれても同じである。例えばすでに19世紀に入った1806年出版のアシャルの『書誌学基礎教程』という本を見ると、「ビブリオグラフィー」を次のように定義している。

「ビブリオグラフィーという言葉はギリシャ語に由来するもので、本についての記述 *description des livres* という意味である。したがって書誌学者 bibliographe とは、本の外的形態に関してや、そこに含まれた題材 *les matières* に関する知識の深い研究をおこなった者のことである。ビブリオグラフィーはまず二つの主要な部分に分けられる。一つは本を構成する様式 *le mode de composer les livres* に関するもの、もう一つは著者のイマジネーションの産物を対象として取り組むものである。

本には写本と印刷本とがある。前者は手で書かれたもので、書誌学者の研究に多くの探求対象を与えてくれる。書誌学者は、あらゆる時代の写本、それらの題材、昔の筆記用具、皮や紙の品質について知らねばならない。

印刷本の研究をするには、活版印刷術の開始期に立ち戻る必要がある。書誌学者は印刷技術の細部のいかなる点にも無知であってはならない。印刷業の歴史とともに、著名な印刷業者たちの歴史にも通暁していなければならない。」(Achard, C. F., *Cours élémentaire de bibliographie, ou la science du bibliothécaire*, 3 vols, Marseille, 1806, t. I, pp. 32-33.)

このアシャルの書の内容の仔細や、これが出版されたフランス革命期の状況についてはまたペニョについて詳しく書く際に再度取り上げたいが、この著者が上の「ビブリオグラフの科学」という意味を継承しているのが分かる。そこには、本という物の物的構成やその生産過程、関連する社会過程を対象にした研究、本という物を対象にした多様な探求という意味が中心に置かれており、定義としてとくに書誌=書目とその編纂行為に引きつけて解そうということはない。そればかりか結局この著者は、それまでの「ビブリオグラフィー」、つまり専門知

識を持った古文書学者や書籍商たちの「ビブリオグラフの科学」を、サブ・タイトルにあるように「図書館員の科学」、つまり公共的な図書館という革命が生んだ新しい機構の運営者たちの業務に拡充して重ねあわせようとしており、そのためこの「ビブリオグラフィー」の中には、分類体系の構築などを含む書誌・書目とその作成に関わる事柄という上記のマルクレスの定義にある内容も、「本を研究対象とした学問」といった内容も、さらには本の値段や蔵書の補修・保存、さらには染み抜きの方法などにいたるまで図書館業務全般に関わることががらが無差別に入ってくることになる。

おそらくフランス語の *bibliographie* もその後この傾向の延長上で使われていけば、上のような英語との差異が生まれることはなかったのかもしれない。だがこの同じ執政期から帝政にかけての時期、先程述べたペニョが登場するのである。ペニョの生涯や事績、彼の「書物学」の内容の仔細は別稿とするが、簡単に言うとこの時彼は2つのことをする。第1には「ビブリオグラフィー」という言葉を文献目録とその編纂という意味に限定し、第2に「書物学 *bibliologie*」という極めて包括的な範疇を設けて、「ビブリオグラフィー」とはその一構成部分であるとしたことである。

彼が図書館の世界に入ったのは1794年である。それはちょうど革命政府が教会や貴族の館の奥深くに眠っていた膨大な量の書物を国民全体の財産として引き出して来た時である。それはフランス全土で800万冊とも1000万冊とも言われ、全国でこの巨大な集積を調査し整理し公開するための努力が始まる。ペニョはフランス東部オート・ソーヌ県の都市ヴズールにあって、同地方の没収書籍を対象にその仕事の前線に立つことになる。彼は『百科全書』に憧れる熱烈な啓蒙主義者であり、その後生涯に単行書だけ数えても70近い著書を残すことになる途方もない精力的な人物だった。そして彼は、この仕事に取り組む中で、自分が当時の「ビブリオグラフィー」という用語では表現できないと感じた新しい学問、つまり書物という物体とそれを取り巻く社会関係のすべてを視野に入れた包括的かつ体系的な科学の構想を夢見る。この情熱にみちた啓蒙の弟子は、この「書物学」というものによって、それまで暗闇に隠され突如目の前に現れた鬱蒼たる巨大な森のような書物の世界のすべてを照らし出せる理性の光、書物という存在・物体に関わる人間のあらゆる認識を網羅し解明するいわば“書物の『百科全書』”を求めたのである。

もちろんこの壮大にすぎようなアイディアがすぐに受け容れられて定着したわけではないし、またペニョ自身、確かにその後の生涯をかけて書物に関する極めて多様な研究を行ったが、この科学の一貫した体系性を説得的に整えることに成功したとも言えないであろう。ペニョを高く評価するマルクレスも「伝統がたやすく膝を屈するものではなく」と嘆いているが (Malcles, *op. cit.*, p. 17), 例えば次に挙げるように『19世紀ラルース辞典』(1870年前後の出版)の説く *bibliographie* の語義は、上記の『百科全書』やアシャルの概念のように、本に関する科学一般という意味を保持している。

「**BIBLIOGRAPHIE** 本に関する科学、ビブリオグラフの科学。...

La *bibliographie* とは本来の意味は書物に関する知識と記述である。だが書物とは、純粹に物質的な観点からでも、あるいは科学、哲学、文学の観点からでも考察されうるものであることからして、『物質的ビブリオグラフィー *bibliographie matérielle*』と多少なりとも『文芸的なビブリオグラフィー *bibliographie littéraire*』とがあることとなる。」

この後者の「文芸的ビブリオグラフィー」とは、この項の筆者の言うには、文学史家や書評雑誌の編集者のような内容評価を目的にした文献通の知識のことで、筆者自身これはむしろ

「文芸批評」という用語の項目で説明すべきものとしており、ここでの問題は前者の「物質的ビブリオグラフィー」なるものの方である。これは次のように説明されている。

『物質的ビブリオグラフィー』はとくに書籍商や図書館員が知っておかねばならないものである。それには、本の版型、その値段、今までに作られた様々な版、それらの版の改訂・異同、希少性、印刷人の名前等々が含まれる。…」

この項目の筆者によると、「物質的ビブリオグラフィー」とは、活版印刷術の発明以来限りなく膨大・多様になった書物を対象に様々な研究をする「ほとんど植物学や鉱物学と同じ広大な科学」である。

新しい伝統の出発

さて英語との対比に戻るが、OEDは英語の *bibliography* の語義として次の4つを列挙している。「1. 本を書くこと」というギリシャ語の語源に近い意味、「2. 書物、その著者同定、印刷、出版、版などの体系的な記述や歴史」、「3. そうした詳細を含んだ本」、「4. 特定の著者や印刷人や国の本の、あるいは何らかの特定のテーマ扱った本のリスト」である。見てのとおりの2は、マルクレスが19世紀までの「伝統」と呼んだ本を対象とする科学というに近い。OEDが挙げるこの語義での最も古い例は1814年のディブディンのものであるが、イギリスではその後、とくに19世紀末から20世紀初めにかけて、有名なグレッグ、マッケロー、ポラードらのいわゆる「書誌学トリオ」の活動をはじめとして、シェークスピア・フォリオを素材にしたシェークスピアのオリジナル・テキストの復元といった英文学研究のためのテキスト・クリティークの手段という意味を強く帯びて、はじめに述べた「分析書誌学」、当時「*new bibliography*」などと呼ばれた分野が発展する。要するに文学者の本文研究と結合しつつ、「本を対象とした研究」という意味での *bibliography* という英単語の内容をいわば拡充し豊富化していくことになると言っていいであろう。しかし同じ頃フランス語圏ではそれとは逆の動きが起き、「ビブリオグラフィー」という用語をむしろ文献目録（およびその編纂）という意味に狭く限定していく方向が取られるのである。

その動きを示すものとして、パリ大学文学部で歴史学を教えていたシャルル・ラングロワが1896年に出版した『歴史学書誌の手引き』という書がある。彼はその中で「ビブリオグラフィー」を次のように定義した。

「La «*bibliographie*» とは書物の科学である。『図書館学 *bibliothéconomie*』が書物の分類・記述や図書館の組織と歴史を扱い、『書物学 *bibliologie*』が書物の歴史 *l'histoire du livre* をその物としての形成（印刷、製本、販売）の観点から扱うのに対して、la *Bibliographie* とは、厳密な意味では、文献目録 *répertoires* を取り扱って、資料に関する情報をできる限り迅速かつ完全に入手する手段を提供する、書物の科学の中の専門的な部分である。」（Langlois, Ch.-V., *Manuel de bibliographie historique*, 2^e éd., Paris, 1901, t. I, p. viii.）

この書は要するに歴史学を専攻する学生・研究者向けに書かれた、歴史学分野の解題付き“書誌の書誌”といった内容のものであるが、この著者がこうした定義をする意図は次のようなものである。「したがってビブリオグラフィーを教えることは道具となる既存の目録を利用する仕方を教えることである。この教育は長い間将来の図書館員たちだけのものとなってきたが、それは間違っている。それは勉強する公衆、とくに学生たちこそふさわしいものなのだ。」

ここでは、マルクレスが「伝統」と呼んだ本を対象とする多様な科学という「ビブリオグラフィー」の概念は、「図書館学」・「書物学」・「ビブリオグラフィー」という互いに異なる意味

の3つの領域に解体されている。「ビブリオグラフィー」とは、既存の目録に関する知識とその利用法となり、また目録の記述規則などは他の図書館業務とともに「図書館学」にまとめられた。一方「書物学」は、固有の歴史を持つ本という物体を対象とした「書物の歴史」という一科学として自律する。

そしてこの解体と自律は、同じ頃、フランスにおける図書館員・文書館員の養成に中心的な役割を果たしていた国立古文書学校 l'Ecole des Chartes の教育の中に自覚的に持ち込まれる。この学校では 1895 年にそれまで一人で担当していた図書館業務と文書館業務の講義が別々の担当者に分けられるのだが、「ビブリグラフィーと図書館業務」と題する図書館関係の講義の最初の担当になったシャルル・モルテは、97 年の開講講義で「ビブリグラフィー」の定義に関して次のように述べている。

「La *Bibliographie* とは、この言葉の最も広く受け容れられている意味では、(写本あるいは印刷の) 書物の記述と分類を目的とした理論的、実践的知識を集めたものである。... 同じ題材を扱った様々な著作の書名、あるいは逆に、その扱った題材が何であろうと、同じ著者によって書かれた著作の書名を取りまとめて、題材順で、あるいは著者名順で分類された本の目録を構成すること、... それがビブリオグラフィーを作るということである。」(Mortet, Ch., *Leçon d'ouverture du Cours de bibliographie et de service des bibliothèques, faites à l'Ecole des Chartes, le 8 décembre 1897, Revue internationale de l'enseignement, t. 35, 1898, pp. 18-19.*)

そして彼はラングロワと同じく「ビブリオグラフィー」・「ビブリオロジー」・「図書館学」という3つの概念の相互限定を採用した。

「1：文献目録 *les répertoires bibliographiques* (あるいは簡略に言って *les bibliographies*)」

「2：書物が、古代から今日に至るまでにその物質的要素や外的な性格に受けた変化、すなわち『書物の歴史』あるいは『ビブリオロジー』」

「3：カタログの編集や公共的な図書館の運営のための技術的な準則、『図書館学』」(*Ibid.*, p. 24.)

この3つが彼の講義の柱である。「ビブリオロジー」=「書物学」は、ペニョの最初の構想では他の2領域をも含んだ包括科学であり、語義上それとはずれている。だがここでは、彼の「書物学」という概念を媒介として、本という固有の歴史を持った物体に歴史的・理論的にアプローチする諸研究を、文献目録の作成や図書館の種々の業務とは別に、学問上の自律した一領域として積極的に位置づける方向が生まれているのを見るべきであろう。それは、その後の流れを知る者から見れば、いわばフランスにおける“新しい伝統”とでも言うべきものになっていくはずである。

bibliographie の現在

このようなフランス語の *bibliographie* の意味の解体・限定を決定づけたのは、1930 年代にルシアン・フェーブラらを指導者とする国際総合センター *le Centre international de synthèse* が討論を組織し、その機関誌 *Revue de synthèse* 誌上で行ったフランス語のいくつかの学術用語に関する定義の明確化の試みだったと思われる。上記のようにこの頃すでにイギリスでは、“the new bibliography”つまり「分析書誌学」の形成が進んでいたのだが、ここでは次のような結論が導き出されている。

「書誌学 *Bibliographie* という言葉には、唯一の正しい定義といったものは存在しない。18 世紀以前には、書誌学作品 *le travail bibliographique* とは写本や印刷本のカタログに限られてい

た。18世紀には一般に、写本、メダル、古文書、本、それらの造本から挿し絵にいたるまで、文字でも製本でも、ある思想あるいはある物の特徴に関するありとあらゆるものが書誌学作品と見なされる。19世紀には、書誌学は他の諸科学の対象を成すものは捨てて、固有の領域を占めることとなる。つまり、商業的または科学的な利用のための一定の方法での書名の調査と分類、である。これには理論的書誌学と実践的書誌学とがありうる。前者は規則や方法を確立すること、および書誌学の歴史に取り組む。後者は定められたリストへのこれらの規則の適用にほかならない。

次の3つの要素がこの用語の定義に入る。

- 1 本の技術的な記述（書名、版型、版 etc.）
- 2 一定の体系における分類
- 3 記述と分類の方法の研究」（Frieden, P., BIBLIOGRAPHIE, *Revue de synthèse*, t. VII, 1934, p. 51.）

こうしてこの筆者によると、「La Bibliographie とは、科学なのではなく、作業の道具、ひとつの『技術 technique』なのである」ということになる。はじめに見たマルクレスの定義はここから直結して出てくるものである。彼女の定義は、上記のラングロワやモルテの考え方では「書物の歴史」という独特の歴史学に限定されていた「書物学」の語義を、ペニョのオリジナルに基づいて復活させて、これに接合したものと見るができるように思う。

そしてこうした定義に立つと、むしろ英語の用法の方が異常に見えてくる。マルクレスの言うには、「アングロサクソン諸国では『ビブリオグラフィー *bibliography*』という言葉は書物の科学という特殊な意味を保っている。...『ビブリオグラフィー』が書物の歴史と技術を、そしてまた文学史を吸収してしまっているのだ」というわけである（Malclès, L.-N., *Manuel de bibliographie*, p. 19.）。また端的な例として、近年とくに「計量書誌学 *bibliométrie*」と呼ばれる分野で開拓者的な業績をあげているエスティヴァルの言うところを挙げておこう。彼は「*Que sais-je?*」文庫所収の *La bibliologie* の著者であり、1988年にたち上げされた「国際ビブリオロジー協会」の代表者でもある。

「... 19世紀末から、ビブリオグラフィーの意味がようやく認識される一方で（上記のモルテやラングロワによる定義について述べている——引用者）、それは、革命とともにその思想の誕生したビブリオロジーと混同される傾向があった。19世紀は混乱と躊躇の時代である。2つの用語の概念が明確に区別され、ビブリオグラフィーとはビブリオロジーの一部であるというその間の関係が確立されるのは、ようやく1934年のことである。それは歴史総合センターによって組織された討論の功績だった。ところが、イギリスのようないくつかの国では、*bibliography* という用語がいまだに2つの言葉の意味を兼ね併せているのである。」（Estivals, R., *La bibliologie*, Paris, 1987, p. 8.）

彼の「ビブリオロジー」概念についてはまた別稿で触れたいが、彼はそれを「書物の歴史」という歴史学の一分野と狭く解するのではなく、マルクレスに倣ってペニョの業績を高く評価し、「ペニョにおけるビブリオロジーは、理論的であると同時に歴史学的な百科全書的なものである」（*Ibid.*, p. 11）ことを強調してその継承を訴えている（ちなみに彼が創設した「国際ビブリオロジー協会」は、その趣旨書の冒頭で「書物の科学たるビブリオロジーは、19世紀はじめにフランスでガブリエル・ペニョによって創始された」と唱っている）。むしろ彼はこれを、コミュニケーションの手段たる文字を媒介とした資料をその形態にかかわらずあらゆる側面から取り上げる理論科学として構築したいと考えているようである。

現在の状況として彼の提唱する「ビブリオロジー」がそのまま広く受け容れられていると思う必要はないが、現在の「ビブリオロジー」という言葉の用法として、最後に、今インターネットで見ることができる「DFMLD MediaLille」という要するにフランスの大学の図書館員養成コースのサイトから例を引いておこう。そこではこのコースの履修のための文献案内を「Bibliologie et histoire du livre: bibliographie (ビブリオロジーと書物の歴史：文献目録)」と題している。ここでの「ビブリオグラフィー」は「書誌」・「文献目録」それ自体のことであり、「書誌学」に関する多様な分野は、理論的なものは「ビブリオロジー」に、歴史的なアプローチのものは「書物の歴史」に、という形で2つの言葉で表現されているわけである。

bibliography と bibliologie

さて以上『百科全書』から近年の例に至るまで、英語の bibliography とは異なるフランス固有の bibliologie-bibliographie の概念区分の存在について見てきた。もちろん現時点の状況として最後のエスティヴァルのような「ビブリオロジー」の提唱が広く市民権を得たということではない。しかしながら、20世紀の初頭、イギリスで「分析書誌学」が形成されていく一方で、フランスでは、イギリス人の用語法を言葉の濫用であるとして拒否し、自国の独自の知的伝統として、ペニョが作っていた「ビブリオロジー」—「ビブリオグラフィー」という区分を出発点にして構想しようという大きな流れのようなものがあつたのではないかと私には思われるのである。

例えば「書誌学」という日本語を考えても、それが英語の「ビブリオグラフィー」の訳語である以上はそれでいいのかもしれないが、「書物を対象とする科学」という基本的な意味から発想していけば、例えば「分析書誌学」が包括している印刷機や製紙法の歴史、書籍商や書籍流通の研究などになぜ「graphy 誌す」学という名前をかぶせるのか、という疑問が出てくるだろう。英語の「分析書誌学」は文学研究のテキスト・クリティークのために作られた手段であつたが、ペニョが提起していた「ビブリオロジー」は、百科全書的な「書物の科学」の構想であり、文献それ自体やテキスト研究に収束しない、文字通り社会学や歴史学一般に向かって広やかに開かれた性質のものだつた。上にも出てきた「書物の歴史」という分野がその後アナル派歴史学と深く結びつき、H.-J. マルタンらの『書物の出現』はじめとした豊かな業績を挙げて現在国際的にも隆盛を極めていることは言うまでもないだろう。そのことをも上に述べた流れの中で捉えることは、あながち不当ではないのではないかと私には思われる。英語で「bibliology」と書くとむしろ「聖書学」という意味になってしまうようだが、そこには英仏両国の「書誌学」の歴史の大きな相違が、というより「書物を対象とする科学」へのアプローチの大きな相違が横たわっており、「書物」というモノを巡っての異なる可能性を開くことになつたのではなからうか。革命の中でペニョが夢見た啓蒙の「書物学」は、意外に大きな遺産を後世に残したのではないかと、私はそう思っている。

(追記：ペニョの生涯とその「書物学」体系の詳細は、古典資料センターと相談の上別稿として発表したいと考えている。)

(福島大学経済経営学類教授)